

### 『資本論』の熟練解体論を考える

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

74

(号 / Number)

1・2

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

2006-08-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00001943>

# 『資本論』の熟練解体論を考える

萩原 進

## 目 次

はじめに

第一章 『資本論』の協業論

第一節 マルクスはなぜ協業論から始めたのであろうか

第二節 単純協業の生産力効果

(以上、本号)

第二章 『資本論』の分業論

第三章 機械と労働—熟練解体論の吟味—

## はじめに

2006年の4月末から5月の初旬にかけて、まる9日間にわたって続いた長い連休を利用して、久しぶりに『資本論』の第1巻を読み直してみることにした。

『資本論』は、やや早熟な左翼かぶれの学生であったわたくしにとって、文字通りの青春の書であった。『資本論』を、岩波文庫の向坂訳で読み始めたのは、たしか左傾化が始まって間もない高等学校の2年生の頃ではなかったかと思う。大学に入ってから、経済学を専攻したこともあって、『資本論』は、座右の書のように常に手元に置いて、何度も何度もくり返し熟読した。大学の2年生になる頃には、ドイツ語がなんとか読めるよう

になったので、原書による講読も始めた。

しかし、大学院に入ってから以降は、理論経済学を専攻しなかったこともあって、『資本論』を手にするのは稀になってしまった。労働問題に関心をもっていたので、大学院では、労働経済学を専攻することにしたのである。大学院生の頃は、アメリカ制度学派の労働理論やアメリカの産業別労働組合史に興味を寄せていたので、勉強時間の大半を、コモンズ編の『合衆国労働史』（全4巻）や『合衆国産業社会史資料』（全10巻）などを読むために費やさざるをえなかった。

それから今日に至るまで、『資本論』を再読する機会は、ついに一度もやってくることはなかった。したがってこのたび、40年ぶりに『資本論』第1巻を再読したことになるわけである。

『資本論』第1巻を読み直そうと思って、学生時代に愛用していたディーツ書店版の原書と岡崎次郎訳の邦訳本（国民文庫）を、自宅の書庫に入って探してみた。いったいどこにしまい込んでしまったのであろうか、いくら探しても見つからない。しかたがないので探すのをあきらめ、思い切って新刊本を買い直すことにした。

しかしソ連邦が崩壊し、共産主義思想が衰滅に向かいつつある今日、マルクスの著作を出版する出版社の数はめっきり減ってしまっている。『資本論』の原書を新刊本で購入するのは、今では必ずしも容易なことではないのである。マルクス主義文献の有名な出版社であり『資本論』の版元でもあったディーツ書店は、ドイツ民主共和国と運命を共にして、すでに消滅してしまっている。さいわい、かつてディーツ書店の日本総代理店であった極東書店に、現在でも在庫が若干残っているというので、ディーツ書店版の『資本論』をなんとか入手することができた。

連休中に、集中して『資本論』第1巻を読み直してみようと思い立ったのは、青春の書に対する単なるノスタルジーから出たのでは勿論ない。どうしても読み直さなければならなくなった理由が、二つほど存在していた

からなのである。

第一は、2006年3月をもって経済学部を定年退職された平林千牧さん（現法政大学総長）のために、『経済志林』の退職記念号が発行される予定になっていた。その退職記念号に、わたくしもさきやかではあれ、小稿を寄稿しようと思っていたからである。平林さんは、わたくしより6歳ほど年長の先輩にあたる方なのであるが、法政大学経済学部のスタッフに同時に採用されたということもあって、同期の桜としてずっと親しくお付き合いをしてきた間柄なのである。

平林さんは、経済理論と経済学史を専攻されていたのに対して、わたくしの専攻は労働経済学であったから、専攻を同じくする同学の徒であったわけではない。しかし二人は共に、宇野弘蔵先生の学問をしたう宇野学派の仲間であった。

平林さんの退職を祝す記念号への寄稿なのであるから、寄稿論文のテーマを、平林さんの専攻分野である経済学史、または『資本論』研究あたりから選ぶのが自然なのであろう。そんなことをあれこれと考えながら、連休を利用して、とりあえず『資本論』第1巻を読み直してみることにしたのである。

第二は、わたくしは最近、コンピュータが製造業の工場における労働過程に及ぼした影響に関心を抱いて、メカトロニクス技術のもとでの機械工の熟練の変容について実証研究を続けてきている。この研究を進めていく過程で、『資本論』第1巻で展開されている機械制工場に関する分析を、もう一度徹底的に精査しておく必要があることを痛感するようになった。

『資本論』第1巻の第4編「相対的剰余価値の生産」は、これまで、労働研究の分野に大きな影響を及ぼしてきたし、今日においても、影響力を持ち続けている。特に、この編で展開されている、機械の進化に伴って工場の働き手の熟練が次第に無用化していくであろうとみなす、いわゆる

“熟練解体論” (deskilling theory) あるいは“労働退化の理論” (work degradation theory) は、労働経済学のみならず産業社会学にも、甚大な影響を及ぼしてきたのである。

コンピュータによって制御される工作機械すなわちメカトロニクス技術の登場は、『資本論』第1巻第4編で展開されている機械の進化にもとづく“熟練解体”法則の作用を通じて、働き手の熟練の無用化をいきつく所までいかせてしまうとみなす考え方は、労働研究の分野では、今日においても主流の位置を占めているといっても過言ではない。

しかし、わたくしの調査したところによれば、メカトロニクス技術の登場は、熟練を無用化していくのではなく、逆に、熟練の内容をより知的なものに高度化させていく傾向を、生みだしてきているように思われる。熟練解体論は、メカトロニクス技術が使用されている工場の実態を調べもせずに提起された、俗論もしくは空論に過ぎない。しかしながら、『資本論』の熟練解体論が労働研究に及ぼした影響があまりにも大きかったせいであろうか、メカトロニクス技術のもとで労働者の熟練は完全に無用化していく、と信じて疑わない人は今でもたいへん多い。本当に困ったことである。

労働研究を、『資本論』の呪縛から解き放つことが必要なのであろう。だがさしあたりは熟練解体論の神話に、科学のメスが入れられねばならない。そのためにはまず、『資本論』第1巻第4編に展開されている熟練解体論の論理を、一つ一ついねいにたどりながら、マルクスが立てた立論の妥当性を徹底的に吟味しておかねばならない。

ところで、機械工学と電気工学を統合する新技術としてのメカトロニクス技術は、1951年に空軍から委託を受けてマサチューセッツ工科大学 (MIT) が開発した、数値制御旋盤 (NC 旋盤) から始まるといわれている

る。しかし、情報処理技術と機械加工技術を結び付け、工作機械をコンピュータで制御するというアイデアそのもののルーツは、19世紀の前半に活躍した数学者のチャールズ・バベジ〔Charles Babbage〕に求めることができるのだそうである。バベジは、数学、機械工学、コンピュータ・サイエンス、経済学、科学史などの諸分野で、優れた業績を残した偉大な科学者であった。現在、ミネソタ大学の工学部には、コンピュータ・サイエンスの父としてのバベジの名誉を記念して、チャールズ・バベジ研究所〔Charles Babbage Institute〕が設置されている。この研究所は、情報技術史に関する世界で唯一のアーカイブズだそうである。

経済学の分野においても、バベジは優れた業績を残している。バベジの著書『機械と工場の経済』The Economy of Machinery and Manufactures (1832年)は、各国語に翻訳され、19世紀の中葉から後半にかけて生産管理の手引書の役割を果たしてきたのである。20世紀にフレデリック・テイラーの科学的管理法が果たした役割に類似した役割を、この本は、19世紀前半のヨーロッパにおいて果たしてきたのである。マルクスも、『資本論』第1巻の第4編を執筆するにあたって、グラスゴウの化学者として有名であったアンドレー・ユアの『工場の哲学』The Philosophy of Manufactures (1835年)とともに、バベジのこの本を徹底的に利用しているのである。特に、工場内の技術的分業と機械の使用が、労働過程に及ぼす影響に関するマルクスの分析は、立論の大半をバベジに負っているといっても過言ではない。

マルクス経済学の形成史に詳しく平林さんの退職記念号への寄稿であることを考慮して、最初わたくしは、バベジの著書『機械と工場の経済』が『資本論』の機械制工業の分析に及ぼした影響について、書いてみようと考えていたのである。しかしいろいろと調べていくうちに、バベジ研究は、わたくしのような文科系の人間には手に負えないテーマであることがわかってきた。

バベジは、機械工学と数学の専門家である。1989年にウイリアム・ピカリング社から、バベジの著作集 *The Works of Charles Babbage* (全11巻) のリプリント版が出版された。著作集の再版をきっかけにして、コンピュータ科学の父としてのバベジ研究への関心は年々高まってきている。

わたくしは、法政大学図書館が所蔵するバベジ著作集の全巻を借り出し、まず全体の目次にざっと眼を通したうえで、各巻の収録論文を飛ばし読みしてみたのである。ほとんどの巻が、整数論、エンジン、コンピュータなどに関する自然科学系の論文で構成されていることがわかった。著作集第1巻の『機械と工場の経済』と自伝の巻以外は、わたくしの能力では理解が困難なことは、火を見るよりもあきらかである。餅屋は餅屋といわれているので、経済学徒がバベジ研究に深入りするのは控えたほうがよさそうである。

そういうわけで、バベジがマルクスに及ぼした影響についての経済学説史的研究は、ひとまず断念することにした。

## 第1章 『資本論』の協業論

### 第一節 マルクスはなぜ協業論から始めたのであろうか

製造業における労働生産性は、工場内における分業——以下では、工場内分業または技術的分業という——と機械の使用によって、飛躍的に向上するであろうということは、子供でもよく知っていることである。工場内分業であれ社会的な分業であれ、いずれの分業であってもおよそ分業には、労働生産性を向上させる生産性効果というものがあることに関して、経済学者は早くから深甚な注意を払ってきた。

学祖であるアダム・スミスは、『国富論』初版の序文において、経済成

長を、人口一人当たりの国民所得の増加であると正しく定義したうえで、経済成長の源泉の検討に移り、経済を成長させる二つの基本的要因について指摘をしている。

「しかしこの割合（人口に対する生産物の割合—引用者）は、どの国民にあっても、二つのことなる事情によって、すなわち、第一には、その国民の労働が一般に適用されるさいの熟練・技量・および判断力（skill, dexterity and judgment）、によって、そして第二には、有用な労働にたずさわる人びとの数とそうでない人びとの数との割合によって規制されずにはいない。ある特定国民の土壌や気候や国土の広さがどうであろうとも、その国民が受ける年々の供給が豊かであるか乏しいかは、そうした特定の情況のなかでの、それらの二つの事情によらざるをえない。」（-19頁）

経済を成長させる二要因の一つは、労働生産力の向上である。その労働生産力は、“労働が一般に適用されるさいの熟練・技量・および判断力”に依存している、とスミスは簡潔に指摘している。“労働が一般に適用されるさいの熟練・技量・および判断力”という表現を、現代風の表現におきかえてみると、経済の成長は人的資本の蓄積にかかっている、ということになるであろう。

序論で経済成長の源泉に言及した後、スミスは、本論の叙述を労働生産力の分析をもって開始する。その際、労働生産力発展の起爆剤の役割をはたす最も重要な要因として、分業が挙げられている。スミスが、労働生産力分析の端緒に置いたのは、周知のように、『国富論』第1編の第1章から第3章にわたって展開されている分業論にほかならない。

スミスによれば、労働生産力の向上に寄与する諸要因のすべては、分業によってもたらされたものである。言い換えればスミスにあっては、分業こそが、生産力を発展せしめる究極の源泉とみなされているのである。



生産力を向上させる要因として、『国富論』では以下の諸要因が指摘されている。

**【 分業が生み出す生産力効果：スミスの理論 】**

- (1) 分業は効率的な生産組織（生産システム）を生み出す。
- (2) 分業は労働者の技能水準を高める（ただし応用力のない専門バカを生む危険性も存在する）。
- (3) 分業は技術進歩ならびに（機械）発明の母である。
- (4) 分業は科学を進歩させる。（ただし応用力のない専門バカを生む危険性も存在する）

文明の進歩は、分業によってもたらされるものである。しかし分業は、市場の範囲と大きさによって制限されている。したがって文明社会は、市場の拡大ともなっていて分業が進化していくにつれて、進歩発展していくものなのである。このようにスミスは考えていたといつてよいであろう。したがって、スミス経済学のエッセンスを一言で表現するとすれば、近代社会とは分業と市場の協奏曲である、という命題に要約できるのではないであろうか。

『資本論』第1巻第4編は、相対的剰余価値の生産を扱っている編であるから、当然のことながら、労働生産力を増進させるもろもろの要因の分析が、中心テーマになってくるわけである。そうであるならば労働生産力の分析を、スミス以来の経済学の伝統に沿って、分業論から開始するのが自然だったのではないであろうか。

ところがどうしたことかマルクスは、生産力の分析を、分業論からではなく協業論から開始しているのである。いったいなぜマルクスは、分業論ではなく協業論から分析を開始したのであるだろうか。

分業論から分析を開始してしまうと、スミスのエピゴーネン（亜流）と見なされかねないので、ことのほか鼻っばしらの強かったマルクスとしては、それではプライドが許さなかったからなのであろうか。それとも何かほかに、協業論から分析を開始しなければならない事由があったのであろうか。

わたくしは、マルクスが協業論から生産力分析を開始した点に、いささか大げさな表現を用いると、マルクス経済学のエッセンスが集約されている、と考えている。分業と市場の協奏曲であるスミス経済学のエッセンスは、分業論に集約することが可能なように、マルクス経済学のエッセンスもまた協業論に集約することができる、というのがわたくしの理解なのである。

マルクスが生産力の分析を、協業論から始めた理由については、理由をいくつかに分けて考えておくべきであろう。

### 【 マルクスが生産力分析を協業論から始めた理由 】

#### (1) 理由〔1〕—生産力は協業（＝集積）から生まれる

スミスは、生産力を増進させるさまざまな要因の根源に、分業があることを強調している。このようなスミスの生産力理論に対して、マルクスは、協業こそが生産力を産み育てる根源的要因であり、生産力の母であることを強調することによって、新しい生産力理論を対置したのである。マルクスによれば、分業は協業の一形態に過ぎないのであり、また、協業があってこそ分業があるといえるのである。

マルクスは、小規模農民経営内の副業や問屋制家内工業のような、労働力と生産手段の分散を特徴とする経営形態に替わって、何十人、何百人の労働者が1箇所に集まって作業をする集合マニユファクチャーの出現こそが、資本主義的経営の始まりを示すものである、と考え

ていたように思われる。産業資本が成立するための技術的な条件は、生産が一定の空間ないしは場所に集積し、生産の集積のために労働力の集積と生産設備の大型化が進行することである。分散していた生産が、同一資本の指揮下におかれて、同一の場所に集積することによって、資本家的な経営がスタートするのである。したがって労働生産力の分析は、分業論ではなく協業論から開始しなければならない。

\* 因みに、生産工場のタイプを、分散マニユファクチャーと集合マニユファクチャーに二分する工場の分類学は、ディドロ、グランベール編『百科全書』の「マニユファクチャー」の項に由来する。この「マニユファクチャー」の項は、ディドロが執筆したと推測されている。

『百科全書』によれば、マニユファクチャーとは「多数の労働者が同じ種類の仕事に従事する場所」のことである。この定義に従えば、分散マニユファクチャーなるものは存在しないはずなのである。しかし何故かディドロは、小規模な家内工業も分散“マニユファクチャー”に含めているのである。

## (2) 理由〔2〕—進化経済学的方法へのこだわり

『資本論』第1巻の第4編を読み進んでいくと、マルクスは、生産様式の進化過程を、単純協業→マニユファクチャー→機械制工場と辿りながら、労働過程の変化と熟練の解体過程の分析を進めていることがわかる。

マルクスの弁証法的方法といわれる方法論は、ヘーゲル論理学という父親とダーウィンの生物進化論という母親の間に生まれた子であったといわれている。マルクス自身もそのように述べている。

マルクスの弁証法的方法とは、事物の分析を、最も単純な始原の形

態から開始し、徐々に複雑な形態の分析に移行し、最後にもっとも複雑な形態の分析にたどりつくという、生物系統学〔Genealogy〕あるいは発生学の方法を踏襲したものである。この生物系統学的方法を、労働生産力の歴史的・理論的分析に応用したのが、『資本論』第1巻の第4編に他ならない。

ここで注意しておかねばならないことは、弁証法的方法は、進化過程を内部矛盾と矛盾の止揚によって説明しようとしている点である。協業が生み出す生産力は、単純協業の限界にぶつかって行き詰まりをみせるが、単純協業の限界は、分業にもとづく協業への移行によって“止揚”される。分業は、協業の生産力を一層高度化させる効果をもたらすが、分業それ自身の内部矛盾によって“分業にもとづく協業”の生産力も行き詰まり、限界を露呈することになる。この“分業にもとづく協業”の矛盾を止揚するべく登場するのが、ほかならぬ機械なのである。かくして資本家的経営は、単純協業→マニファクチャー（分業にもとづく協業）→機械制工場、の順にしたがって進化していくことになるのである。

\* スミスもマルクスも、一方で分業の生産力効果を評価しながらも、他方で分業の否定的側面、すなわち分業が逆に労働生産性を低下させるマイナス効果を伴うことに注目している。マルクスの場合、どちらかというところ、分業の否定的側面を強調しがちであった。

のちに詳しく検討する予定であるが、マルクスは、『資本論』第1巻第4編第13章のおわりに近い第9節「工場法」において、まったく唐突に、“労働の転換” Wechsel der Arbeit なるものが徹底的に進む結果、やがて分業のない社会、誰でもが何でも好きな仕事を選べる社会がやってくる、といった想像するのも困難な奇妙なユートピアの到来を予言するのである。

＊ ＊ マルクスの弁証法的，進化経済学的，生物系統学的方法は，エレンスト・ヘッケルの固体発生は系統発生（＝進化）を繰り返すという原理を連想させる。マルクスは，歴史過程を概念的に模写する方法こそが唯一の（社会）科学的方法である，と信じていた。ヘッケルの原理は，ある意味でマルクスのこうした方法論に対して，強力な援護射撃をしてくれる理論であるといつてよい。

しかし現代の生物学においては，ヘッケルの原理はおおむね否定されているようである。（同僚の生物学者である岡部雅史教授からの聞き書きによる）。

## (2) 理由〔3〕—社会観の相違

スミスが，生産力理論の基底に分業論を置いたのに対して，マルクスが協業論を対置したのは，上述した二つの理由によるものと考えられる。しかしわたくしは，もう一つ，マルクスが協業論を重視した理由が存在するのではないかと考えている。

スミスは，人間が生産物の交換（trade＝交易）を行うのは，人間が生まれもった本能にもとづくのではないかと考えていた。すなわちスミスによれば，市場経済は本能に根ざす人間社会のもっとも自然な形態なのであり，自然であるからこそ商業的社会は，市場の広がりとともに進歩し発展していくことができるのである。

こうした自由主義者スミスの市場経済礼賛論に対し，真っ向から対決しようとしたのが，共産主義者のマルクスなのである。マルクス（とエンゲルス）は，未来の共産主義社会は，生産手段の社会的所有を基礎にした集権的計画経済以外の何物でもないと明言している。

わたくしは，共産主義者のマルクスが，スミスの分業論に対抗して協業論を対置したのは，分業論を基底に経済理論を展開していった自

由主義者のスミスに対する、イデオロギー的な反撥にもとづくのではないか、と推量しているのである。

## 第二節 単純協業の生産力効果

前節で指摘しておいたように、マルクスは、協業によって生産が組織されるようになることが、資本主義的経営の始まりであると考えていた。大規模な協業は、古代社会にもみられるが、協業は資本主義に固有のものである、とマルクスは主張する。まず、マルクスの言わんとすることに、耳を傾けてみよう。

「大規模な協業の応用は古代世界や中世や近代植民地にもまばらに現れるが、これは直接的な支配隷属関係に、もとづいている。これに反して、資本主義的形態は、はじめから、自分の労働力を資本に売る自由な賃金労働者を前提にしている。とはいえ、歴史的には、それは、農民経営にたいして、また同職組合的形態をそなえているかどうかにかかわらず独立手工業経営にたいして、対立して発展する。これらのものにたいして資本主義的協業が協業の一つの特別な歴史的な形態として現われるのではなく、協業そのものが、資本主義的生産過程に特有な、そしてこの生産過程を独自のものとして区別する歴史的な形態として現われるのである」(438～9頁)

「協業の単純な姿そのものは、そのいっそう発展した諸形態と並んで特殊な形態として現われるとはいえ、協業はつねに資本主義的生産様式の基本形態なのである」(440頁)

柳田国男は、綿織物の普及とともに、人間の生活が大きく変化していくことに気づいて、木綿革命を境にして人間の歴史を区分することを考えた。『木綿以前のこと』(1939年)において、柳田は、木綿の普及以前と以後で、日本人の生活様式だけでなく日本人の身体にまで変化が見られるようになったことを指摘している。

柳田のこのような言い方を真似させてもらうとすると、さしずめマルクスは、生産力の発展史を、大きく『協業以前と協業以後』とに区分していると考えられるのである。

協業は、何ゆえに生産力を高めることができるのであろうか。『資本論』は、協業の生産力効果について、いかなる分析をおこなっているのであろうか。

協業の生産力効果の分析は、分業の生産力効果の分析と同様、経済学における難問中の難問に属する問題であるといえる。協業の生産力効果の分析が容易でないのは、生産力効果が、協業という組織もしくはシステムによって生み出されるからである。

最近経済地理学者たちは、アメリカのシリコンバレーのような企業の一定地域への集積（クラスター）に注目し、クラスターの経済分析に力を入れてきている。良く知られているように、企業の地域集積現象に対して最初に経済分析のメスを入れたのはマーシャルである。マーシャルは、企業内部の生産組織が生み出す効率を内部経済（internal economy）と名づけ、企業間の関係ないしは企業と社会との関係から生じる効率を外部経済（external economy）と名づけたうえで、生産組織や市場のような経済組織が何ゆえに労働生産性を高めることができるのかの分析を試みた。

協業の生産力効果の分析は、いわばマーシャルの内部経済論の分野に属するものである。多数の分散した小さな作業場における生産と比較して、規模の大きい協業工場（単純協業マニュファクチャー）における生産は、なにゆえに高い生産性を生みだすことができるのであろうか。それは、協業によって規模の経済（scale economy）が生みだされるからなのである。しからは、協業はどうして規模の経済を生むことができるのであろうか。

（注）規模の経済は、工場内の技術的分業が生み出す生産力効果によっ

て説明されるのが普通である。マルクスは、協業の生産力効果によって規模の経済を説明しているといえる。

マルクスの言うところは次の通りである。

「12時間の1労働日が6シリングに対象化されるとすれば、この労働日の1200は6シリングの1200倍に対象化される。一方の場合には、12労働時間の1200倍が、他方の場合には12労働時間が生産物に合体される。価値生産では、多数はつねにただ多数の個として数えられる。だから、価値生産については、1200人の労働者が別々に生産するか、それとも同じ資本の指揮のもとにいっしょになって生産するかで、なんの相違も生じないのである」(423～4頁)

ところが、……

「とはいえ、ある限界のなかでは、ある変化が生じる」(424頁)、という。

マルクスがおこなった問題提起を、簡潔に整理しておくことにしよう。

### 【協業の生産力効果に関するマルクスの問題提起】

〔設問〕 1200人の労働者が、個々バラバラに分散して、12時間の家内労働を行った時に生産される価値の総額は、1200人が同じ（単純協業）工場において12時間労働した時に生産される価値の総額よりは小さい。何故でしょうか。

〔解答〕 協業という生産組織は、不思議な能力を有していて、それが生産力効果を生み出すからである。

マルクスは、協業の生産力効果について、さらなる分析を続ける。

“協業という生産組織”が有する魔法のような“不思議な能力”とは、いったい何なのであろうか。この問いに対して、マルクスは以下



のように答えている。

- (1) 価値に対象化される労働は、社会的平均質の労働であり、したがって平均的労働力の発現である。
- (2) 1人の1労働日を、たとえば12時間としよう。そうすれば、同時に働かされる12人の労働者の1労働日は、144時間の1総労働日となる。そして、12人のうちの各人の労働は多かれ少なかれ社会的平均労働とは違っているかもしれない。……それにもかかわらず、各個人の1労働日は、144時間の1総労働日の12分の1として、社会的な平均質もっている。
- (3) これに反して、もし12人の労働者のうちの2人ずつがそれぞれ1人の小親方に使われるとすれば、各個の親方が同じ価値量を生産するかどうか……は偶然となる。

同一職種に属する12人の熟練労働者であるとはいえ、かれらの間で労働の熟練度〔Arbeitsfertigkeit〕における個人差が、完全になくなってしまふことはありえない。しかし、12人が協業工場で働く場合には、各人の労働は、社会的平均質の労働〔Arbeit von gesellschaftlicher Durchschnittsqualitaet〕として評価されることになるのである。価値そのものが社会的平均である以上、それは当然のことである。

しかし、12人の労働者のうち2人ずつがそれぞれ1人の小親方に使われる家内工業の場合には、熟練度の社会的平均化を実現することは不可能なのである。熟練度の低い労働者が生産する12時間労働の価値は、熟練度の高い労働者が生産する12時間労働の価値よりも低いままなのである。熟練工の賃金が同一であるとするならば、熟練度の低い労働者を使っている小親方の収益はそれだけ低くならざるをえない。

マルクスの説明によると、小経営の分散は、熟練度の低い労働者からなる生産性の低い作業場を温存してしまうのに対して、協業工場は、熟練の平均質を生み出すことができるが故に生産力効果を生むことができる、というのである。協業の生産力効果に関するマルクスの説明は、説得力があるといえるであろうか。残念ながら否である。疑問はさらに果てしなく広がり、謎は深まる一方であるといわざるをえない。

商品の交換価値の源泉としての労働は、社会的平均労働にほかならない。分散した小経営のもとでは、社会的平均労働を形成することができないのに対して、規模の大きい協業のもとでは社会的平均労働を形成することができる、とマルクスはいう。価値を平均として定義してしまえば、たしかにマルクスの言う通りなのである。しかしこのような論法は、同義反復以外の何物でもないのである。

マルクスは、投下労働価値説にもとづいて協業の生産力効果を分析しようとしたために、価値と平均に関する意味のない議論を、延々と続けているのである。同章の注で、「平均的個人についてはケトレの所説を参照せよ」とまで述べている。

協業の生産力効果の分析は、協業が労働生産性を高めるのは何故か、という一点に答えればよいのである。マルクスは、価値形成力のことなる様々な個別の労働から、いかにして社会的平均労働を導き出すかという価値実体論上の難問を、協業の生産力効果の分析と混同してしまい、泥沼の混乱に陥ってしまっているのではないであろうか。

しかしさすがはマルクスである。協業論を、一般的剰余価値率に関する不毛な議論からひとまず切り離し、協業そのものから生じる生産力の分析に注意を集中していくのである。協業そのものから生じる生産力のことを、分業の生産力効果と同様にマルクスは、“労働の社会的生産力”ある

いは“社会的労働の生産力”と呼んでいる。この社会的生産力という言葉はなかなか味のある言葉である。わたくしはこれを、協業組織の生産力効果〔skill of cooperation〕と言い換えておきたい。

協業組織の生産力効果を生み出す要因として、マルクスは以下に列挙する9つの要因を、指摘しているのであるが、重要なのであえて9項目すべてを列挙しておくことにする。

### 【 協業そのものが生み出す生産力の源泉 】

- (1) 個別労働者の機械的な合計であっても、労働の機械的ポテンシャルが高まる。(例：歩兵が、バラバラで戦闘に参加するよりも、隊を組んで集団で戦った方が攻撃力が高くなる)
- (2) 労働の空間的作用範囲を拡大する。(例：大きなレンガ造りの建物を建てる時、いくつもの違った方面から同時に着工できるため、工期を大幅に短縮できる)
- (3) 生産規模に比べて空間的生産場面を狭めることができる。(例：10個の小工場を1個の工場に統合する場合、空間的生産場面は小工場の10倍以下ですますことができる)
- (4) 決定的な瞬間に多くの労働をわずかな時間に流動させることができる。(例：羊の毛の刈り取り、穀物の収穫)
- (5) 個々人の競争心を刺激して活力を緊張させることによって生産性が高まる。
- (6) 多くの人々の同種の作業に連続性と多面性とを押印する。(例：12人のレンガ積工がレイ方式によって、手でレンガを下から上に運ぶ場合)
- (7) いろいろな作業を同時に行うことができる。(例：人がたくさん同じ工場で働いているからこそ、作業の分業も可能になる)
- (8) 生産手段を共同使用によって節約できる。(例：工場の建屋、原料

の倉庫，生産装置などの生産手段は，共同利用によって節約できる)  
(9) 個々人の労働に社会的平均労働の性格を与える。

協業の生産力効果に関するマルクスの分析は，まことに緻密で，見事というほかないであろう。

〔注の1〕『資本論』からの引用は、『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）の第23巻（岡崎次郎訳）から行った。

〔注の2〕『国富論』からの引用は，杉山忠平訳・水田洋監訳の岩波文庫版による。

（次号に続く）

## Comments on Karl Marx's Deskilling Theory

Susumu HAGIWARA

## 《Abstract》

In 1951, Massachusetts Institute of Technology succeeded in designing an epoch-making lathe for the United States Air Force. The newly invented lathe was called a computer-aided or CNC machine tool. Use of this new technology spread quickly throughout industrialized nations and has altered the engineering industries, especially the skill requirements of skilled machinist workers.

Most researchers have asserted that machinists' skills became redundant with the introduction of CNC machine tools. Yet one can find arguments to the contrary. Karl Marx established deskilling theory and analyzed the impact of machines on the labor process. This paper seeks to scrutinize Book IV of Volume I of *Das Kapital* and to verify the validity of Marx's deskilling theory.